

令和8年度（2026年度）第1回吹田健やか年輪プラン推進専門分科会

1 開催日時 令和8年（2026年）7月2日（木）
午後2時00分から午後4時00分まで

2 開催場所 吹田市総合防災センター（DRCSuita）6階多目的室

3 出席者

石倉 康次	委員・会長（立命館大学 元教授）
志藤 修史	委員・副会長（大谷大学 社会学部 教授）
岡本 吉宏	臨時委員（一般社団法人 吹田市歯科医師会 会長）
岡橋 義弘	臨時委員（一般社団法人 吹田市薬剤師会 副会長）
佐中 義定	臨時委員（社会福祉法人吹田市社会福祉協議会 副会長）
土井 留美	臨時委員（吹田市民生・児童委員協議会 副会長）
岩本 和宏	臨時委員（吹田コスモスの会(認知症家族の会) 会長）
矢上 敬子	臨時委員（吹田市ボランティア連絡会 会長）
菊澤 薫	臨時委員（吹田市介護保険事業者連絡会 居宅介護支援部会 委員）
富士野 香織	臨時委員（吹田市介護保険事業者連絡会 訪問介護部会 委員）
柴田 真也	臨時委員（吹田市介護保険事業者連絡会 通所介護・通所リハビリテーション部会 委員）
正置 美貴	臨時委員（吹田市介護保険事業者連絡会 訪問看護・訪問リハビリテーション・訪問入浴部会 委員）
寺阪 健一	臨時委員（吹田市介護保険事業者連絡会 介護保険施設部会 委員）
家保 美穂	臨時委員（公益社団法人 吹田市シルバー人材センター 主任）
津田 貞夫	公募市民（市民）
上條 美代子	公募市民（市民）

(欠席)

山根 茂男	委員（一般社団法人 吹田市高齢クラブ連合会 理事長）
新居延 高宏	臨時委員（一般社団法人 吹田市医師会 副会長）
菅沼 一平	臨時委員（吹田市認知症カフェ交流会 幹事）

【事務局】

梅森福祉部長、竹本高齢福祉室長、下村高齢福祉室参事（司会）、
山際高齢福祉室参事、濱本高齢福祉室参事、外山高齢福祉室主幹、
竹田高齢福祉室主幹、吉賀高齢福祉室主査、高須高齢福祉室主任、
前川高齢福祉室係員
ジェイエムシー株式会社 大内氏、朝倉氏、竹浦氏（計画策定業務委託業者）

4 案件

- （１）吹田健やか年輪プラン策定について
- （２）第１０期吹田健やか年輪プランの基本方針について
- （３）高齢者等の生活と健康に関する調査報告
- （４）グループワーク
- （５）その他

5 配付資料 別添のとおり

6 議事内容

事務局： 【開会】

（下村参事）

【部長挨拶】

【資料確認】

【傍聴者の報告】

（傍聴者なし）

石倉会長： それでは、次第に沿って議事を進めていきたいと思います。
まず案件（１）について、事務局から説明をお願いします。

（１）吹田健やか年輪プラン策定について
事務局から資料に基づき説明

石倉会長： 案件（１）について質問、御意見ございませんでしょうか。
ないようですので、次に案件（２）について、事務局から説明をお願いいたします。

（２）第１０期吹田健やか年輪プランの基本方針について
事務局から資料に基づき説明

石倉会長： 案件（２）について質問、御意見ございませんでしょうか。
ないようですので、次に案件（３）について、事務局から説明をお願いいたします。

（３）高齢者等の生活と健康に関する調査報告
事務局から資料に基づき説明

石倉会長： 案件（３）について質問、御意見ございませんでしょうか。

津田委員： 色々な調査の結果を報告顶きましたが、資料4を見ると、高齢者の方の約半数が「何らかの活動に参加したい」と思っているが、参加できていない状況があります。高齢者が増えることは、個人が持つ時間的資産（財産）が地域に蓄積されることでもあります。これを社会資産として捉え、ボランティア活動などへ積極的に導く対応が必要ではないでしょうか。自身の経験ですが、退職後にボランティアを探しても何があるのか分からず、内容を見ると介護関係の清掃や洗濯の補助が多く、私たちの世代以上含め、役割分担意識が強く、男性は家事などをしてこなかった人が多く、躊躇してしまうと思います。人口の半分を占める高齢男性を地域でうまく活用する方法を考えるべきではないでしょうか。例えば、私が参加した介護予防推進や男女共同参画のボランティアでは、3～4回の講座で活動内容を丁寧に紹介し、最後に登録を促すステップがあったため参加がしやすかったです。こうしたノウハウを地域ボランティア育成に活用してはどうでしょうか。

矢上委員： 社会福祉協議会のボランティアセンター等でも講座を開く試みはされていますが、最近は退職年齢が高くなっており、なかなかボランティアに来られにくい状況もあるようです。ただ、ボランティア連合に登録されている活動には、介護だけでなく、趣味（歌や市民活動など）を生かした余暇を楽しむ活動もたくさんあります。そういう場所をもっと知ってもらえたらと思います。

石倉会長： 男性高齢者の力の活用という視点ですね。資料4の13ページを見ると、高齢になっても結構仕事を続けておられる方が多いのも最近の特徴のようです。

矢上委員： 地域で活動されている男性にお話を聞くと、「マンションの管理組合の役員をやったことがきっかけで地域に出るようになった」という方が結構いらっしゃいます。

石倉会長： 男性が地域に出ていくチャンネルを作っていくことが大切だと思います。

津田委員： 資料4の20ページ「情報収集」を見ると、行政サービスの情報手段として「市報すいた」がトップで、見やすく分かりやすいです。一方、市のホームページは14%と低くなっています。例えば高齢福祉室の「はつらつ元気大作戦」などの素晴らしいプログラムを探そうとしても、HPの階

層が深く福祉から老人福祉、介護予防・日常生活支援総合事業などよほど法律に詳しくないと行き着くことが難しいと思います。トップページや介護予防のページに「はつらつ元気大作戦」と大きく名前を出してリンクを貼るなど、見やすさの工夫をしてほしいです。

石 倉 会 長： ホームページの出し方ですね。

正 置 委 員： 高齢になって急にボランティアや地域のつながりを持とうとするのは難しいです。2050年に60代になる人は今40代。私が吹田で子育てをしていた20年前は、保育園の「親父の会」など父親同士・母親同士の横のつながりが非常に強かったのですが、今の若い世代に聞くと、そうしたつながりがなくなってきているそうです。今つながっていない人が高齢になって急につながれるわけがありません。2050年を見据えるなら、今の高齢者だけでなく、若い世代が地域とどうつながっていけるかも合わせて考える必要があります。

菊 澤 委 員： 一度切れたつながりを回復するのは難しいため「つながり続けられる環境」が大切ではないでしょうか。さらに、アンケートで自立・要支援の方が施設を強く望んでいるのは「家族に迷惑をかけたくない」という思いが大きいためだと思います。要介護になってからも「在宅サービスが充実していればまだ自宅でやっていける」と実感できればニーズが変わります。在宅サービスをしっかり充実させることが、在宅生活の期間を伸ばすことにつながるのではないのでしょうか。

石 倉 会 長： そうですね。

岩 本 委 員： 資料の10、11ページにある高齢者虐待やうつに関してですが、特に認知症の介護者にとって虐待の気持ちが芽生えるのは日常茶飯事です。家族の会でも必死に抑えている状態だが、ガス抜きをする場所がありません。近所の人にも異変に気づいても手を出せない環境があります。2人暮らしや親子介護で行き詰まり、精神的に限界になってから私たちの会へ来られるケースも多いです。サービスは入っていても心を開いていない壁があるんです。国の政策は認知症本人ばかりに焦点を当て、家族ケアの視点が減らされているのが現状であるため、ぜひ吹田市独自の政策として「本人と介護者をセットでケアする支援」を入れていただけたらありがたいと思います。

菊 澤 委 員 : 6月1日にケアマネジャーが殺害される大変痛ましい事件があり、厚労省や協会からも声明が出されました。1人ケアマネジャーの事業所など組織のバックアップがない場合、どのように地域のケアマネジャー同士でつながり、危険を察知するような地域アセスメント(共通認識を持つシステム)が取れるのかを考えています。近所付き合いがあれば、ちょっとした異変の際にお互い助け合えるが、尊厳や個人情報の壁もあり難しい面もあります。ただ、地域とのつながりをどう繋いでいくかで様々な予防ができると思います。

石 倉 会 長 : 他にご意見ありますでしょうか。

津 田 委 員 : 先ほどの「家族のガス抜き」に関連して、全国的な課題として「認知症サポーター養成講座」を受けてオレンジリングをもらっても、その後の活動に繋がっていない現状があると思います。認知症サポーターや、その人材を家族のガス抜きの傾聴ボランティアなどにシステムとしてうまく活用できたりすると良いと思います。

岩 本 委 員 : チームオレンジは国の制度として地区ごとに実施することになっていますが、吹田市には33の地区があり、活発なところとそうでないところの差、地域格差が非常に広がっています。また、ボランティアをしたいという男性が現実の介護現場を知ったときに「僕にはできない」とミスマッチが起こる現状もあります。そのあたりのマッチングを市の方でうまく取り組んでいただけるとありがたいです。

石 倉 会 長 : 次期計画の課題が出てきました。他はいかがでしょうか。

岡 本 委 員 : 地域のPTAや青少年の指導などに関わっている立場から見ても、コロナ禍で地域のつながりがバツンと分断された後の戻りが特に悪いように思います。吹田市は地区によって人口の入れ替わりや構成、課題が全く異なるため、「吹田市としてこれをやれば一発で大丈夫」という施策はないと思います。それぞれの地区に応じた作戦を立て、早めに対応していくことが必要ではないでしょうか。

石 倉 会 長 : 地域の実情に応じた取組を考えていかなければいけないということでしょうね。

岡 橋 委 員： アンケートの上位には特別養護老人ホームや在宅サービスが来ますが、それ以下のボランティア活動は、ボランティア任せでは限界があると感じます。ある程度の報酬が発生する仕組みや業体としての動きがないと認知もされにくいのではないのでしょうか。

石 倉 会 長： 薬局等への相談はあるのでしょうか。

岡 橋 委 員： 当然あります。認知症の始まりとして「薬が飲めていないことが、ある日突然分かる（本人は飲んでいると言うけれども、家に行くと大量に出てくる）」というケースが多いです。関わり合いは非常に多いですが、しっかりしている人ほど薬の管理などの介入を拒否される難しさもあります。

石 倉 会 長： 他にないようでしたら、次に案件（４）について、事務局から説明をお願いいたします。

（４）グループワーク

事務局から別紙に基づき説明

その後、２グループ（Ａグループ、Ｂグループ）に分かれてグループワークを実施
グループワーク終了後、各班から結果の報告

石 倉 会 長： それでは、発表に移りたいと思います。
Ａグループから発表していただきます。

Ａ グ ル ー プ： Ａ班では生活支援、財産管理、死後事務、身元保証について議論しました。いちばん意見が多かったのは「生活支援」で、ゴミ出しや郵便物が溜まる、水道トラブルが起きても誰も頼めずいつの間にかゴミ屋敷化してしまうといった、日常の細かな支障・問題が挙げられました。財産管理の面では成年後見制度がありますが、後見人だけでは「身上保護（監護）」や医療行為の同意（手術等の同意書へのサイン）ができない課題があります。また、死後事務委任契約を結んでいても、本人が亡くなったことを管理者に知らせる見守り体制がなければスタートしません。

地域性の問題として、吹田市にはJR以南の昔からの神社や人のつながりがある古い地区と、千里ニュータウンのように横のつながりや核とな

るものが全くない新しい地域があります。吹田市の自治会加入率は非常に低く、今後自治会だけに頼るのは難しいため、地域の中に「シェアハウス」や「共同組合的な住宅」といった、新たなコミュニティ・つながりを作る提案が出されました。ただし、介入にあたっては本人のプライバシーやプライドを傷つけない配慮が必要という点も大きな課題です。

石 倉 会 長： それでは、次にBグループをお願いします。

B グ ル ー プ： 専門職や事業者、病院関係者の視点からの意見が多く出ました。本人・
（志藤副会長） 家族・専門職が三位一体で連携して状況を合わせていく中で、判断ができる身寄り（キーパーソン）がいないことは、事業や医療を進める上で非常に大きな困難が発生します。また、事業者側としては、経営の観点から「きちんと費用を回収できるか」という保証がないと対応が難しいという現実的な問題があります。身元保証人に関して、一部で非常に高額な費用を請求されているトラブル事例もあり、これらが社会問題化している背景もあります。

解決策として、課題を「時間軸（身寄りがなくなる前、なってから、その後）」や「課題別」に細かく分析し、行政がやるべき部分、専門職（行政書士等）や成年後見がバックアップすべき部分を整理し、どこに機能していない「落とし穴」があるかをきちんと見極める必要があるという意見が出ました。また、まだ元気な段階から、マンションや地域コミュニティの中でお互いの状況を柔らかく理解しておく関係性づくりが、後々非常に役に立つのではないかという議論がされました。

事 務 局： 非常に難しい議題に対し、貴重なご意見をありがとうございました。本日いただいたご意見は一度事務局へ持ち帰り、課題の整理をさせていただきます。次回、素案という形で提示するか、改めて意見を求めるか検討し、ご報告いたします。

石 倉 会 長： 他にも何かご意見ございますか。
ないようでしたら、案件（５）について、事務局からお願いします。

（５）その他

事務局から次回の会議日程について説明

最後に本日の会議について、会長、副会長から総括

志藤副会長： 厚生労働省としても、社会福祉法の改正を含め身寄りのない人の問題は新しい重要課題として掲げています。吹田市の高齢化率や地域特性を考えたとき、吹田市全体の計画もさることながら、やはり地域ごとに高齢者の健康や暮らしの課題を設定し、3年後、5年後にこの地域での暮らしはどうあるべきかというイメージの共有が大切です。それによって住民や事業者が連携するきっかけが生まれると考えます。今日の議論では、市民の社会参加がひとつの焦点となりました。住んでいる地域の中にどのような機会や方向性があるかを具体的に示すことができれば、事業者同士の横のつながりも強まります。国は2040年を高齢者人口のピークと想定していますが、吹田市はその10年後（2050年）がピークです。状況がどう急変するか分からないからこそ、今のうちから1人1人にきちんと声かけられる、呼びかけができるような介護保険事業計画・高齢者福祉計画のあり方を考えていきたいと思っております。

石倉会長： 本日の前半の議論とグループワークは非常に密接に繋がっていたと感じます。第10期の課題として身寄りのない人のサポートをどうするかに焦点を当てたことで、自治会加入率が低い吹田市の課題や、地区ごとの格差といった核心的な部分が浮き彫りになりました。もちろん介護保険の課題はここだけではなく、老老介護の夫婦の問題、事業所の人材確保や経営維持など多岐にわたります。また、岩本委員からあったケアラー支援をどのように盛り込んでいくかも大きな課題です。あと3回委員会がございまして、本日出た多様な意見を次回に活かし、さらに課題の抽出を深めていきたいと思っております。皆様、本日は大変お疲れ様でした。